トロントの小学生

川上 美智子

息子の淳は、七才八か月。トロント郊外にあるハリウッド・パブリック・スクール（児童数三五〇人）の二・三年生である。去年までは、歩いて七分位のグレンエイボン・パブリック・スクールに通っていた。児童数減少のため学校が廃校になり、九月の新学期から、スクールバスでわが家から約一・五キロ離れた今の学校に通うことになったのである。

ここでは、通学区域が一応決まってはいるが、子供をどこの学校（私立も含め）に入れるかは親の自由。教育税（固定資産税に含まれている）は高く、わが家の場合、八百六十八ドルの固定資産税のうち四百五十二ドルが教育税だ。税金は、その家の子供の有無にかかわらず、持ち家の価値により決まる。税金が高いせいか、学校で使う教科書、ノート、鉛筆、クレヨン、その他一切は学校持ち。息子は、毎日お弁当だけを持って学校へ通っている。

授業は、小学校一年生から、午後三時半まで。土・日はお休み。日本のような給食はなく、各自、家に帰って昼食をとる。カナダは多民族の国だから、食べものもいろいろ異なり、学校給食なんてとうてい考えられないのである。

私たちは夫婦とも働いているので、息子にお弁当をもたせている。学校から帰ったあとは、近所のお母さんにベビーシッターとして息子を見てもらっている。

さて、淳は二・三年生と書いたが、これは、クラスの人員の許す限り、各自の能力（主に読み書きと算数）に応じたクラスにふり分けられるシステムになっており、彼の場合、本来は二年生だが、三年生との合同クラスに入っているからである。この方が先生にとっても生徒にとっても、クラスの質がより一定となり、能率がよいとのことである。この市（ノースヨーク）の小学校二年生は、秋にOTTS−LENNON testという一種のIQテストを受け、Gifted（ギフテッド）（英才）クラスに入れるかどうかを決める。テストを拒否する親は、その旨、事前に校長宛申し出る。淳も例外なく、このテストを受けた。その後、少し出来が良かったとみえ、第二次家庭調査書が親宛に来た。もしかしたら、英才クラスに入れられるのかも知れない。

息子の幼稚園での親友、ジョナサンは、まだマチュアリティー（精神的入学適令期）に達していないということで、SK1（シニア・キンダガーデン・ワン）という幼稚園と一年生の中間の特別クラスに入っている。この種の特別クラスは、普通の学校の中に、マチュアリティーに達していない子供用、パーセプショナル・プロブレム（専門家ではないので良く分らないが、視覚及び聴覚からの信号が脳に正しく伝わらない）をもった子供用、行動異常の子供用、などと分けて設けてあり、子供たちの程度に応じ、特別クラス（通常五−八人の小クラス）で特別指導が行なわれている。一日のうち特別クラスに数時間、残りは普通クラス、という風に、その子供に適した教育が流動的に行われている。

このような〝問題児〟は、通常、幼稚園の先生が見つけ出し、親と常に連絡をとりながら、医者、心理学者と相談し、その問題に応じた適切な措置、教育が検討され、実施される。このような扱いは、なるべく早く普通クラスに入れる様にという方針の下になされ、それぞれの子に向いた適切な教育が行なわれるので、親は一応、この方針に満足している様だ。

淳の二・三年混合クラスは計二十五名。週に数時間、盲目の児童も二人混じって一緒に授業し、主に体操、音楽、図工を受けている。クラスの子供たちは、盲人も含め、身体的に欠陥のある人に対し、理解も思いやりも深く、変に特別扱いはしていない。

子供の成績表は、秋（九−十二月）、冬（一−三月）、春（四−六月）の各学期ごとに評価される。評価基準は、大変良い、まあまあ、もう少し、の三段階。科目は、国語、算数、環境学習、図工、音楽、人格及び社会性と六つに分かれ、それぞれについて理解力、技術などと細かく評価される。先生は、課目毎に一、二、三の数字を書き込むだけでなく、ていねいなコメントをつけ加える。息子は幼稚園にいたとき、先生に学校での態度が非常に良い、特に先生を敬い、友人と仲良くし…と、親がくすぐったくなるほど誉められていた。考えてみると、私たち日本人には、年長者や先生を敬うのは当然という、大変良い伝統があり、特に子供に教えなくても、家の内外での親の態度から自然に伝わったのであろう。

ここでは、相手が誰であろうとyouと呼ぶことからも計り知れるように、上下関係の認識がうすい。

教室でも、各自勝手な行動を小さい時からとっているようで、例えば、休み時、